須磨の春｜輝錦凌▼柳の精｜若宮旭登▼城山｜須田誠舟▼竜の口｜平野鉦水▼後鳥羽の院｜木原綾子▼茨木｜押川旭葉▼講評｜NHK山岡知博先生。

一水会大阪支部長更迭

九年間の永きに亘り支部長をつとめて大きな功績を残した小川吟水氏は二月十日の総会で退任、現副支部長木村蓮水氏が新たに支部長に選出就任された。

ラヂオ琵琶放送

○一月二十四日(木)午後三時十分NHK・FM。板谷旭邑｜都落▼柴田旭堂｜壇の浦。
○一月二十七日(日)午後十時二十分NHK・FM。現代の音楽（昭和五十四年度文化庁芸術祭優秀賞受賞作品の内）篠笛と琵琶のための詩曲（笛）藤舎推峰▼（琵琶）山崎旭萍。

訃報

松田静水氏　脳出血のため一月二十四日逝去、享年八十三。二十六日通夜、二十七日葬儀。喪主松田静男氏。

故永田錦心師の直門で明治四十五年奥伝、大正十年総伝を宗家錦心師より允許されて師範代となり幾多優秀の門弟を世に送り出し、錦心流琵琶界の最長老で一水会名誉会長、日本琵琶楽協会顧問としての重職に在り、旧臘勲五等瑞宝章受賞の栄に浴された。資性温厚、高潔の紳士として上品な演奏振りは広く世に知られ、特に小栗栖、舟弁慶、道成寺などは入神の技で送葬には各流派琵琶人多数が参列して永別を惜しんだ。松田氏の訃は単に錦心流のみならず全琵琶界のために誠に悲しむべきことで茲に謹んで弔意を表し御冥福を祈る。

松井灯水氏　心不全のため一月十八日逝去、享年八十一。故長沢赤水師、故山崎草水氏の門下で昭和十一年総伝。大正十三年から十三年間秋田市で教授所を開いて多くの門弟を育成し現在一水会秋田支部長、一水会本部相談役で秋田県内に於ける琵琶普及発展の大功労者。昭和四十八年秋田市文化団体連盟賞受賞。舟弁慶、羅生門などが得意曲で特に弾法の名手であった。謹んで哀悼し御冥福を祈る。

桃木耳水氏　（本名平岡利助氏）一月十七日老衰のため逝去、享年八十六。故永田錦心師の直門で大正時代から戦前にかけ京都、大阪に於て多くの子弟を養成し故丸山巴水師と共に関西錦心流の双璧として活躍された。最近は健康勝れず入退院を繰返し療養中であった。謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。

（予告）

○**京都琵琶協会三月定例会**　三月九日(日)午後一時本部平井会長宅。
○**山崎旭萍会の演奏会**　三月十五日(土)午前十時半大阪御堂筋北御堂会館。
○**琵琶各派名流演奏会**　五月五日(木)十時｜十六時四十五分神戸市県庁横兵庫県民会館、主催日本琵琶楽協会関西支部（有料）
○**琵琶各流派合同演奏会**　五月二十五日(日)十一時｜十七時京都烏丸御池京都商工会議所ホール。京都琵琶協会・一水会京都支部・四明会共催。

あとがき

春三月、冬眠から醒めた琵琶界もそろそろ活動期に入る●薩摩琵琶が筑前琵琶の歴史よりも古いということは今ここで殊更らしく申し上げるまでもなく読者のよく御存じのことである●ところが現在では歴史的に浅い筑前琵琶の方が遥かに現代的に成長しているのではあるまいか●大東亜戦争のために琵琶界をはじめ一般邦楽は中断され、それだけ世間に普及をはばまれたのは云うまでもないが、戦後の琵琶界は遅々として発展せず三味線音楽などに較べ数段おくれているように思われる●士気を鼓舞し勇壮の気風を養うために島津日新公が奨励された薩摩琵琶が戦争の悲惨さを知らない若人に向かないのは無理からぬこと●これに反して筑前琵琶や錦琵琶は多分に三味線音楽を取り入れた柔らかい編曲が創造され、華道吟、茶道吟、書道吟などは特にそれぞれの道の人を引つけている●薩摩系でも舞踊を組入れた演奏や他の邦楽器との合奏などで舞台面を華やかにすることも考えてみる必要があろう●但しこの場合は飽くまでも琵琶が主体で琵琶が他の楽器に喰われてしまわないよう充分配慮しなければならぬ●同時に、演歌や歌謡曲などの流行歌に興味を持つ若い層の男女に琵琶の真髄を理解させ琵琶楽が如何に奥底の深い良い音楽であるかということを納得させたいと思う。（妄言多謝）

〒569　昭和五十五年三月一日発行（非売品）
発行所　高槻市津之江北町一一ノ二三　京絃社
編集者　村上寛植
電話〇七二六（七三）六〇五一番

琵琶機関紙　京絃　第三〇九号　京絃社

琵琶（一七）

忘れられんとする音の世界

村山道宣

筑前琵琶（上）

橘　智定

盲僧琵琶の土壌から生まれ、発展していった琵琶の中には、薩摩のほかに筑前琵琶がある。筑前琵琶は、北九州や中国地方の盲僧達が育くんで来た笹琵琶やうぐいす琵琶の音楽的土壌から生まれたものである。明治中期以降、東京を起点に次第に拡がって行った筑前琵琶は、どの様な道を辿ったのであろうか、琵琶の達者な盲僧が芸能人となり各地を巡演して歩くような事例も出て来た。玄清法流の盲僧の家に生まれた一丸智定（一八四八｜一九一九、明治二十六年に橘と改姓）もまたその一人であった。父祖伝来の荒神琵琶やくずれ琵琶に飽きたらなくなった智定は、八人芸（釣鐘、太皷、笛、皷、鈴、木魚等、多くの鳴り物を琵琶を弾きながら演奏する芸当）などを看板として各地を巡演して廻るようになる。

そのようにしながらも研究熱心な智定は、巡演先の各地に於いて、琵琶に関する見聞を広め、研究を続けた。特に薩摩琵琶に関心を持った智定はその習得に励み、それまでの彼の持ち芸にその特徴を生かし、創作琵琶を新作するようになる。

また、博多には智定の他にも創作琵琶に取り組んだ者達がいた。鶴崎賢定、今村外園、吉田竹子、加野熊次郎などであった。智定は勿論であるが、これらの人達の熱心な研究と努力に依って明治三十年頃になり、筑前琵琶と呼ばれる音楽が形を成して行ったのである。橘流を起し、旭翁と号した智定は、明治三十二年に行われた御前演奏を機に、人々に広く知られるようになり、筑前琵琶の普及に努め、次々と新作を発表して行った。

五絃琵琶と四絃琵琶

そして旭翁（智定）は娘婿の旭宗の協力を得て、薩摩琵琶の特色を大幅に取り入れそれまで使っていた四絃琵琶を改造し、五絃琵琶を完成する。五絃琵琶は華やかなだけに以後、筑前琵琶の主体となって行った。しかし、このことには、様々な問題点が含まれているように思われる。四絃琵琶は、それまで盲僧達に使われていたうぐいす琵琶の腹板の材質を桧から桐に、胴の材質を梅檀から桜や桑に代え、また上から張られていた腹板をはめ込み式にして創作されたものであった。ここまではさしたる問題はなかったのである。問題となるのは新しく考案された五絃琵琶が薩摩琵琶に習い、胴内部に橋を掛け、支柱を立てるように改造されたということである。この様な胴内部の改造により、笹琵琶やうぐいす琵琶と深いつながりを持っていた筑前琵琶の独自な音色は失われ、五絃琵琶の音色は楽琵琶系の楽器である薩摩琵琶の音色に近いものになった。このことは北九州や中国地方の盲僧の長い歴史の中で育くまれて来た筑前琵琶独得の、本来の音色を失わせる結果を招いたのであった。

また初代旭翁（大正八年没）、二代旭翁（昭和二十年没）、初代の娘婿、旭宗は共に作曲家として優れ、数多くの名曲を発表し、人人の関心を集めていった。こうして橘の派は、吉田派、鶴崎派を圧し、全国に筑前琵琶を普及させて行ったのである。その後、橘の派は智定の死後、二代旭翁を宗家とする旭会と、旭宗を宗家とする橘会の二派に分かれ対立す

るようになる。また、この二派の他に、博多の吉田竹子の弟子、高峰筑風は上京して高峰琵琶と名付ける一派を開き、さらに、橘の派から出て独立する名手達もあり、大正から昭和にかかる時期の琵琶界は正に群雄割拠の情勢であった。

五絃閑話（六）

水藤五郎

伝承とは（二）

琵琶界が直面している問題の最も大きなものに後継者とその育成のことがあります。これ等を考える時、今日、早急になさなければならない事は何か、それが如何なる方法で行えるかが話題になりましょう。

そこでまず第一に実行しなければならない事は、琵琶界の幣害を取りのぞくことでしょう。言葉を変えれば、琵琶界の体質改善であります。

その第一歩として〝会の在り方〟の検討を提唱してきました。則ち、演奏会と温習会とを明確に区別して、新しい聴衆を満足させるに足る演奏会を企画し、一人十五ずつに分担した二十四番のプログラム会を名流演奏会などと考えないことです。本当に楽しめる会を考えるべきでしょう。もし、この様な会が生れない状況が続くとしたら、琵琶楽は趣味の音楽で止まり、人に感動を与えぬまま、伝承はとだえて、後継者は生まれないでしょう。自己の手で芸の命脈をちぢめる状況から早く脱け出さなくてはなりません。

そこで次ぎの幣害にすすむことにします。

琵琶界には〝修業の場〟がないと云う事がそれであります。このために、琵琶人の中で玄人と素人、つまり、プロとアマの区別がつかない状態を生んでいます。玄人と素人の差異は本来何によって決める可きか難しい事です。が、社会一般では資格の有無がその規準となるのでしょう。具体的には、弁護士となる為には、当然その資格が必要となり、いくら自分が法律の専門知識を持っていても、社会で、弁護士として活動するのにはその手続きや資格が要求される訳です。これと同様に芸の社会では、その芸能についての玄人であるか素人であるかをはっきりと区別してきました。そして、その規準となるのは〝修業の場〟に入るか否かでありました。落語家ならば、入門をして寄席に勤める事が要件となり、歌舞伎、文楽等の音曲は〝座興行〟に出勤する事が玄人の修業であり証（あか）しでもありました。大道芸人であれば、当然の事、人々の往来する街々で芸渡世をすることが必要でありました。新内語りが廓を流し、尺八の虚無僧が全国を旅することがその道の第一歩でした。

この様に修業の場であり、又、生活の場であるそれぞれの場に於いて、技を磨き成長してゆきました。その結果として、玄人は素人と区別されたわけです。勿論、芸を磨いている玄人に教えを乞う素人と云う関係もありますから、教える資格の有無が玄人・素人の区別にもなりました。

遊芸であった芸能がいつしか芸道として考えられる面を持ってきた室町期以降、玄人は玄人の芸道倫理が生まれ、素人は素人のとる可き倫理が唱えられ確立されてきました。玄人は芸能専従者としての芸に対しての厳しさ、玄人同志の掟・義等が要求され、今日迄かなりの範囲で受け継がれているのであります。又、素人は芸能愛好者としての芸に対しての謙虚さ純粋精神等が望まれ、趣味人のおおらかさがその基調となっていました。琵琶もその例外ではなく、室町以降、検校、勾当などの当道職制度の下で、平家琵琶は専門伝承され、いわゆる玄人として活動してきました。盲僧琵琶に付いても同様に、〝門付け〟としての修業・生活の場がありました。

が、薩摩琵琶の開花した明治以降は、それが薩摩人の教養音楽であった沿革から、芸の玄人たると云う観念は生まれぬまゝ今日に至りました。ただ、錦心流・錦等の派生や、筑前琵琶の誕生があったりして、琵琶の玄人の生まれる例がありましたが、それも個人の姿勢にとどまる段階で、琵琶界全体にその思潮が波及することなく〝修業の場〟も生まれませんでした。この為、琵琶界は全て素人で構成することとなり、時折〝切符を買って入る

聴衆〟は素人の演奏に退屈して、やはり、修業の場、生活の場で鍛えられた芸能の方に足をむけることになるわけです。そこで、琵琶人は絃友の呼び合いや来会のしあいで舞台と客席を埋め、〝よかった／／〟で合言葉をかわすことになりました。本当に琵琶の将来を思うのなら、玄人と素人の在り方を提起して、〝修業の場〟を作り出し、そこから玄人の琵琶人を育ててゆかなければなりません。表面上の〝上手とか下手とか〟以上に大切なのは真に芸を愛して学ぶ志を持つか否かでしょう。

琵琶人口を芸能専従者と愛好者に分け、一人の専従者に百人の愛好者を作る努力を課すのです。百人の玄人が出来れば十万人の愛好者、つまり素人が出来る計算です。今迄の如く琵琶では喰えない!! の合言葉は何んの効果にもならないでしょう。芸で喰えないのは、落語も新劇も全て同様です。若い落語家は今日、アルバイトをしながら寄席の修業に臨みます。その辛苦が今の落語人気を支え、落語消滅を防ぎました。今、琵琶界にとって大切なのは、この様な下手でも玄人を志す熱意の人を育てる事でしょう。

摂津国崇禅寺馬場の仇討

辻旭城

阪急電車梅田駅から、千里山線の普通電車に乗る。淀川の長い鉄橋を渡ると十三（じゅうそう）である。

崇禅寺駅で下車して駅前から右に折れ、人通りの少ない住宅街の細い道を抜けて歩いて行くと、行く手にこんもりした森が見える。筆者も阪急京都線は、京都琵琶協会や一水会京都支部の演奏会を聴くため始終通っているが、特急で素通りしていて、崇禅寺で下車するのは始めてであった。

さて崇禅寺へ着いてみて驚いた、コーヒー色のトタンで周囲を囲んである。入口の左手に〝県庁所在地跡〟と刻んだ古るびた石碑がある。眼鏡をかけてよく見ると、明治二年に住吉、東成、西成、島上、能勢、川辺の八郡を行政管理する摂津県庁が、ここ崇禅寺の伽藍を仮の役所として設置され、三ケ月を経て豊崎県と改称、更に現在の大阪府として目出度く出発したのである。

昔、足利六代将軍義政がこの寺に葬られ、また細川家代々の菩提寺であったので寺は隆盛を極め、八町四方の境内には大伽藍が建ち並び将軍家からは八百石の寺領を賜っていたというこの大寺が、今はトタン板に囲まれ、栄枯盛衰の理を如実に示している。

八百米四方の境内と、三ヘクタールの田畑を持った大阪市内で一番裕福な寺ということのほかに、歌舞伎狂言〝崇禅寺馬場仇討〟の舞台としても著名で、正徳五年（一七一四）十一月四日、遠城治左衛門、安藤喜八郎の兄弟が、だまし討ちに逢った悲劇の場である。

大和国郡山城は、往時其角が〝菜の花の中に城あり郡山〟と詠んだところで犬伏城とも呼ばれ、天主跡、石畳、濠などが今に残っている。足利時代末期、小田切春次の築城で、秀吉の弟秀長がここを領したこともあった。

遠城治左衛門、安藤喜八郎の兄弟は、大和郡山本田信濃守の家来で、二人の弟の宗左衛門（17）を、正徳五年五月に生田伝八郎（25）が、試合の遺恨から殺害して逃亡したところから、この物語ははじまる。

弟の仇を兄が討つことは逆縁で、仇討免許が下りないため兄弟は大和郡山藩を脱藩して伝八郎のあとを追い、やがて大阪谷町四丁目で剣術の指南をしている伝八郎に、生玉神社の境内でめぐりあった。

伝八郎は「神域を血で汚すのは恐れ多い、崇禅寺馬場で潔ぎよく討たれたい」と云い逃れ、約束の十一月四日未明に、老松の高くに登って身をひそめていた伝八郎の弟子十数人が飛び下り襲いかかり、遂に兄弟は返り討ちになった。二十六才と二十四才であった。

この話を聞いたかっての江戸町奉行与力で、大阪に移り住んでいた宗春が「志、勇なるに感じ一碑を建てて亡霊を弔うものなり」と刻んで建てた兄弟の墓が境内にある。碑には、〝剣樹心英居士、刀山天雄居士〟と刻まれている。

墓はだまし討ちに合った無念さをにじませたように黒ずんでいた。その後兄弟の身寄りの者が参詣したとき、忘れていった竹杖から

生えたという〝身寄りの竹〟が、その傍らにひとむら残っている。

与力宗春の墓がなぜこゝにあるのだろうか、近くに謀殺されたという足利義教の首塚や、人質になるのを強くこばんで自刃した細川ガラシャ夫人の墓など、どれもが幽霊らしく見えて、墓の下から〝恨めしい〟という声が聞こえて来そうであった。

安寿と厨子王

佐藤忠男

昔、丹後の国に、山椒太夫という暴虐な荘園の管理人がいて、人買いから人を買って奴隷労働をさせていた。安寿と厨子王という幼い姉弟は身分ある地方官の子だったが、失脚して遠くへ流された父を追って、母と一諸に旅をしている途中、越後の直江津で人さらえにだまされ、母は蝦夷が島に売られ、姉弟は山椒太夫の荘園に売られた。安寿は塩くみ、厨子王は柴刈りの重労働にこき使われる。二人が一諸に山に行ったとき、姉は弟を励まして脱走させ、自分は山椒太夫の前で拷問されて死んだ。脱走した厨子王は京へ出て出世し、丹後へ役人として戻って山椒太夫に復讐し、蝦夷が島に渡って母を助け出す。

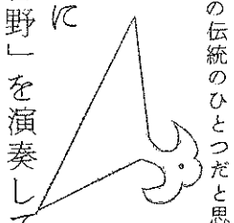
「山椒太夫」の名で知られるこの物語は、桃山時代から江戸初期に流行した説教節の一つであるが、このもとの話はもっと古くから、今の瞽女のような芸人たちによって各地の民衆の間を語り歩かれていた。この説教節の主要な演目である「苅萱」や「小栗判官」「信徳丸」「愛護若」などは、大正時代ぐらいまでは語り物や絵物語として誰でも知っていた。「山椒太夫」だけがいまだによく知られているのは、森欧外が小説に書き直したからであるが、もとの説教節に較べると随分残酷さは減っている。

この古い物語が今でも人々を感動させるポイントの一つは、弟を助けるために姉が犠牲になるというところではなかろうか。突飛な想像かも知れないが、挿話の女神アマテラスにはスサノオという乱暴者の弟がいる。弟の乱暴を悲しんだ姉は岩屋に身を隠し、このために此の世は闇になる。姉に甘え、姉を困らせる弟。そして弟をおもう姉の悲しみは、この世を闇にするほどの力を持っているということ。姉神と弟神の間のこの深い精神的なつながりは、以後、日本人の心を深くゆすぶる数々の物語の原型になっているように思う。

特に近代の映画や小説には、弟を励ますしっかり者の姉を美しく描いた作品が少なくない。幸田文の「おとうと」はその代表的な作品であろう。実在の人物では、幕末の志士坂本竜馬の姉が気丈なしっかり者で、竜馬はいつもこの姉を尊敬し、姉から励まされながら活躍した。民族学者の柳田国男は「妹の力」というエッセイで、妹の純潔な愛が兄を支えるというイメージの伝統を論じたが、姉の力強い励ましも日本の伝統のひとつだと思う。

鴨寿会に「春日野」を演奏して

京都　馬場鴨水



立春ともなり、青い空の色がやや和みて、眼にはおのずから高きに親しむ時がやって来ました。

しらくもの絶えまに靡く青やぎの
かつらぎ山に春風ぞ吹く　（新古今集）

木の芽吹きの春も間近いことです。

わが下鴨老人クラブ鴨寿会は一月二十八日(月)、恒例により下鴨神社の参集殿で新春総会が開かれた。ポカポカ陽気で絶好の日に恵まれ、境内の赤い鳥居、老樹も春を待つ心にあふれているようである。出席者一六〇名、満員の盛況となった。

この日余興十数番、私は四度目の今回の演奏で、司会者からのていねいなお言葉にやや緊張した。マイクはよく利いている。

幾日か前からこの曲「春日野」にとりくみ、力一ぱい演奏したいと思った。琵琶をなつかしみ、琵琶を聴きたい老人たちと思いこみ、

うれしい演奏であった。

「春日野」は愛吟集の巻一にある初伝級の曲である。美しい麗句によって錦織のように新春の風景を叙し、春のよろこびが一貫し、「君が治むる御代なれば、幾万代までも変らぬ御代こそめでたけれ。」で結んでいる。まことに目出たい曲である。

この単調な構成から成る曲をうまく表現出来るであろうか。

初心の若い頃をも思い浮かべ、まず語句の持つ意味をしっかり把握してこれを生かし、情景を心に浮かべながらゆっくり歌うことと思った。発声、音調、リズムを通じて感動を与えるものは何か。など考えてみた。

所要時間八分、調子二本。

○なつかしみの琵琶をどこまで感じとってもらえたか。

○琵琶の調子、運び、音色がリズミカルに流れていたか。

終って大拍手を頂いた。

かのテープをかけて自己批評もまた楽しい。

（五五、二、三）

寸言（42）

山内一豊

安土桃山時代の武将で土佐藩祖。織田、豊臣、徳川とつかえ、慶長五年上杉征伐と関ケ原の役に功をたてたが同十年没。信長の関馬の際、妻女が爪に火をともして貯えた十両をはたいて名馬を買わせた逸話は有名。

ヤング・パワー　期待する

兎我野　純

去る一月二十七日西宮市の三浦蓮水会初謡会に招かれての感想

至難な琵琶に敢えてチャレンジする若人、しかも先輩の居並ぶ前でなんら憶する事もなく堂々と弾奏する気概に私は感動を覚えた。自分の若い頃を想起して青天霹靂の思いである。

某君の「中川島」。歌本なしで全曲演奏、まことに壮なるかなと云いたい。私は二、三年前に○○師から云われて実行にふみ切ったが、公演の場では万一絶句したらとの危惧から、前に歌本を置いている。君の今後に期待したい。強いてアドバイスさせて貰うならば、強吟と弱吟、歌のメリハリ、序破急を留意されれば、もっともっと素晴らしくなるのではないか。でも年輪が解決するでしょう。前途は正に洋々たり、好青年よ、頑張って下さい。

「川中島」の謡出し〝天文二十三年〟をテンプンと謡われましたが、お気付きになったでしょうか。

その他「白虎隊」「井伊大老」「七福神」「黒田武士」「耳なし芳一」いづれも持味を生かして至芸を御披露下され、琵琶のため有意義なる集合でありました。

琵琶ひとすじ

一柳季代

お琴や三味線と並んで、琵琶が女の習いことの一つとして隆盛を極めた時機がありました。大正初めの大阪の下町でのこと。今でいえばさしずめピアノかバレエ、そして大半が途中でやめてゆくのは昔と同じ。

その琵琶を、曲折を経ながらもやめず、続けて六十二年、遂に家元宗範となり、昭和五十年には芸術選奨文部大臣賞、大阪文化祭賞を受賞、昨秋には芸術祭レコード部門優秀賞の栄に輝いた人、山崎旭萃さん（72）、その〝琵琶ひとすじ〟の歩みをお話いたしましょう。

山崎旭萃さん、本名永井ハルさんは明治三十九年生まれ、大阪・中之島の市庁前でうぶ声をあげた生粋の浪速っ子。家業はイスの製造業。階下で職人さんがおおぜいカタカタ、ガチャガチャ働いているふんいきで育ったイトはんでした。当時の習いごとは、三味線は色町、琴はお屋敷町が常識。医者から腺病質だから「お腹から声を出すものを」とすすめられ、イトはんは琵琶を習うことになります。

当時の娯楽は無声映画、弁士の隣に琵琶を

奏でる人が座り、悲劇も最高潮に達するや、ビビンビーンと、哀切のメロディをかきならし、観客の紅涙をしぼったもの。幼い旭萃さんもその音色にすっかり魅せられて、筑前琵琶の師匠に入門しました。十一才のときです。

琵琶は最初は四絃で、初伝、中伝、雅号、奥伝まで、皆伝になると五絃に移る。ー好きこそものの上手なれとか。月に三曲ぐらいをあげ十六才のときにはもう人に教える上達ぶり。すっかり体も丈夫になりましたが、もうそのころはあけても暮れても琵琶ー。

年ごろになっても、四十人ものお弟子さんをかかえて夜半まで教える日々。当時の親は娘にきびしい時代、「モノを教える人間は、男の人に笑い顔見せてはいけない」というぐあいで、お色気もなし。それでも世話する人があって、門人の遠縁に当たる人と結婚することになりました。が、芸事は一人前でも家事は半人前、それに両親ひきつれての結婚ー十八才のときです。

勿論琵琶を続けることが条件、やがて橘会宗家直門に入会する幸運を得て、放送に出たり、新曲を伝授されたり、厳しいながらも華やかな演奏活動が続きます。

琵琶ざんまいの結婚生活、ご主人とは何かにつけて衝突が絶えない！これも無理のない話です。ところがー、家へ帰っても妻は琵琶のけいこ、夫はついに深酒ー、酔って電車からおちたケガがもとで、下半身不随の床に伏したときはさすがに大きなショックを受けました。当時いた大阪尼ケ崎で、せっせとリハビリテーションにつきそってー。そのころがもっとも辛いころでした、でも、むしろ体が不自由になってからの方が、「主人は琵琶に行ってこいとやさしくなって来た」のも、お互い夫婦の年輪を重ねて来た、というものでしょうか。

ご主人の体がよくなるころ、戦争はたけなわ、昭和二十年夫と子供二人をつれて、夫の故郷鹿児島へ疎開しました。以来四年間、お百姓をして暮らすことになります。

が、鹿児島は名にしおう薩摩琵琶の土地、旭萃さんは筑前琵琶。他流試合に不足なし、結構認めてもらって「山崎さん、薩摩に変わりゃっせ」とまでいわれたりしました。旭萃さんの声はやや太く、女性ながら〝せめ〟のはげしい曲や歌を得意とするところから、そういわれたのでしょう。お呼びがかかるとんぼの鍬を放って琵琶をかかえ、せっせとあぜ道を出かけたものでした。

昭和三十四年生母が亡くなり、子供も大阪に就職したのを機に大阪へ戻りふたたび厳しい稽古を宗家から受けることになります。

昭和四十五年に夫を亡くしましたが、二人の子供は立派に成長しました。旭萃さんは奈良を根拠に高槻の教場、そして全国二百人の門下の指導にと東京、九州まで飛ぶ活躍ぶり。宗家が亡くなってからは〝宗範〟の資格で家元代理をつとめ、「壇の浦秘曲」「都落ち」の作曲も公認され、橘会を背負って立つ立場です。が、勇壮な琵琶がもてはやされた戦時中に較べれば衰微の一途、そこで三十年代から勢いを盛り返してきた詩吟と琵琶を合わせ、素人にも入り易い短い歌と曲の〝琵吟〟を創作、大和流琵吟楽を創設しました。

また、昨年CBSソニーの企画で吹き込んだ筑前琵琶と琵吟九曲のLPが、秋の芸術祭レコード部門優秀賞、その他の賞を受ける栄に輝きました。

高槻の教室で愛器の琵琶を手にしながら「まあま、好きでやってきたことを褒めて頂くなんてーお恥づかしい。」おおらかで気さくなおばあちゃま、一曲華やかな〝さくら〟を披露して下さいました。しなやかに動く手と落ちついた音色は、さすがこの道六十年、聴く人の心をやわらげます。（一月十日附サンケイ新聞から転載ー琵琶を抱いた写真は省略）

日本芸術琵琶普絃会一月例会

一月十三日(日)昼一時東京文京区大塚六丁目の貸席京屋にて開催。諸弾法ー錦幽▼敦盛ー福田弾峰▼石童丸ー内田隆章▼門出ー坂入晴峰▼利休の最期ー山崎錦幽▼春の調べー松本蕾水▼羅生門ー金森旭弾▼夜討曽我ー高田栄水▼八甲田山ー杉山旗水▼滸陽江ー青木早水。以上研修を終り小宴の後六時散会した。

大阪琵琶同好会の総会・新年宴会

一月十五日(木)昼一時奈良簡易保険保養センター、出席者約二十名。総会のあと左記演奏し夕刻から宴会に移り薄暮散会した。城山ー矢野旭信▼君が代ー島津、米原▼粟津ケ原ー辻旭城▼戦艦大和ー田中歓水▼桐一葉ー石橋旭嶺▼壇の浦ー作花旭友▼井伊大老ー天津八千代▼鴨川の露ー中島旭穂。外に奇術、浪曲、詩吟、舞踊など数番。

前田秋声・阿部秀子氏演奏

一月十七日(木)夕四時名古屋市北区の寺院に於て平凡社国民百科辞典編集長の招きにより前田秋声ー石童丸▼阿部秀子ー須磨の浦風を演奏好評を受けた。

琵琶楽名流大会

一月二十六日(土)正午東京銀座ガスホール、東京新聞・日本琵琶楽協会共催（有料）。五條橋ー丸山、佐々木▼秋風故郷山ー岡田旭蓮。絃旭社▼新撰組ー村木桜柳▼羅生門ー若宮旭登▼彰義隊ー古家絃風▼竜の口ー松崎洲陵▼屋島の誉ー青山旭子▼赤沢山の夕嵐ー伊集院牙城▼湖水乗切ー田中鶴旺▼戻り橋ー若林旭洋、斉藤旭芳、青木旭洲▼吉野落ー本橋汕舟▼堅田落ー石坂鶴朋▼忠度ー小原旭成▼城山ー仲川秀邦▼小栗栖ー押川旭葉▼滝口入道ー遠藤鶴東▼舟弁慶ー荒川洲博・絃洲帆▼春の調べー木原綾子、平田由実・琴水藤万里子▼大楠公ー広瀬圭穂▼吉野落(下)ー鈴木流泉▼伊豆の御難ー都錦穂▼那須与市ー中村旭園▼井伊大老ー田中光水▼鉢の木ー須田誠舟。

一水会神戸支部・蓮水会の総会、新年初謡会

一月二十七日(日)昼西宮市夙川公民館和室。本年度事業予算、役員重任認任に続いて初謡会。吉野山懐古ー高原柳水▼弁の内侍ー田中珠水▼重衡ー吉田秋水▼屋島懐古ー川上琵水▼川中島ー関川昌広▼白虎隊ー杭東詠水▼井伊大老ー小西甫水▼黒田武士ー田中歓水▼井伊大老ー楊嶽水▼七福神ー木庭旭山▼耳なし芳一ー会主三浦蓮水▼詩吟富士山外数十題。以上を終って宴に移り松野紫雲氏寄贈の福引に興じ又隠し芸など続出、七時半散会。（来賓）木庭旭山、小西甫水、松川緑廷、関川昌宏、三浦博、前田きよ子、岩田きぬ、川渕勇、田中歓水の諸氏。

名古屋秋声会の新年初謡会

一月二十七日(日)昼名古屋中小企業福祉会館。前田秋声、阿部秋子、奥村慧水、牧秋静（南水）、西川磯水、岸本港水、谷津壮水、長谷川秋楓、松村秋翠、山本紅香外会員数氏出席して初謡会が開催された。

浜松市第一回音楽祭

二月二日(土)、十七日(日)の二回、浜松市民会館、主催浜松市音楽文化連盟。邦楽と洋楽を一体とした連盟が誕生し邦楽部長は小野鶴彦氏が就任、琵琶は(1)四十七士、(2)あゝ宗良親王、(3)近藤勇、(4)三方ケ原、(5)門琵琶を小野部長指揮のもとに大勢で合奏された。

大阪緻水会如月会新春演奏会

二月三日(日)昼大阪天神橋朝陽会館、後援緻水会本部・一水会大阪支部。霧の川中島ー島田▼荒城の月ー中野▼重衡ー柏木▼毒饅頭ー稲葉卓水▼石童丸ー杭東詠水▼大江山ー中野淀水▼（以下来賓）別れの盃ー増田剛水▼本能寺ー中野岑水、住田紘水▼湖水乗切ー中山嬢水▼小栗栖ー尾山好水▼戸隠山ー木村蓮水▼松の廊下ー中山鳳水▼新撰組ー田中光水▼茨木ー小川吟水▼敦盛ー土田寡水、佐藤智水・紘荒井藍水▼耳なし芳一ー三浦蓮水▼舟弁慶ー主催者森中志水、松原孔水、広瀬顕水。

京都琵琶協会二月例会

二月三日(日)昼本部平井会長宅。数日来の寒冷厳しい中を物ともせず会員集合、例により数氏研修演奏のあと来たる五月二十五日開催演奏会の各自出演曲目選定その他の協議や芸談雑談に花を咲かせ夕食を共にして散会した。（出席者）馬場鴨水、林旭蒲、戸倉旭嶺、梅原旭濤、矢吹旭美津、山岡旭清、安住旭康、牧南水、荒木旭媛、水内燈水、平井春嶺、植村寞水。

日本琵琶楽協会定例研究会

二月十一日(木)昼東京新宿区洲鳳会館（有料）。